

地域の拠点を作り直すことの意味

「子ども食堂」は「子どもの食堂」ではない

「子ども食堂」という名を耳にしたことがある人は多いだろう。

それは、子どもの貧困や欠食、孤食といった問題のため、と理解されがちだ。もちろんそうした側面もあるが、機能はそれだけではない。

湯浅誠さんに聞いた。

社会活動家

湯浅 誠

●ゆあさ・まこと 1969年東京生まれ。90年代からホームレス支援などに携わる。内閣府参与、法政大学教授を経て、現在、東京大学特任教授。著書に『ヒーローを待っている』(朝日文庫)など。

増える！「子ども食堂」

——「子ども食堂」について湯浅さんの考えを聞かせてください。

「子ども食堂」は、ひとことでは言えませんが、子どもが一人でも行ける無料、または低額の食堂です。「地域食堂」「みんなの食堂」と呼んでいるところもあり、民間発の自主的、自発的

な取り組みです。大半は、個人が集まってボランティアで運営されていますが、自治体などに申請して補助金を得るケースもあります。ただ、それで利益を出せるわけではありません。せんどね。

個人のボランティアだけでなく、食材や資金は寄付を募ったり、団体や企業の協力があつたりして運営されているところも多くあります。常

設できるところはまだまだ少なく、月に一回か二回の開催が多いですね。——そういう活動は、お寺や自治会など、地域の拠点的な機能を持つところで運営されていたのではないのでしょうか。

従来はそうだったかもしれませんが。しかし、いまは地域と人々を結ぶ力は、ずいぶん弱くなってしまいました。これは都市部だけでなく地方でも同

様の状況といえます。子ども会に人が集まらないとか、年一回のお祭りを開催するのがやっとなとか、そういう地域が日本国中にあります。

敗戦後のこの国は、高度経済成長やバブルに沸いた時代、そしてバブル崩壊などがあり今日に至っていますが、一貫して地縁や人とのしがらみを捨て続けてきたように思います。地縁などというわずらわしさを捨て、気楽で効率のいい、とにかく便利な生活を追い求めてきた。ボタン一つ押せば、機械がなんでもやってくれるようなユートピアを思い描いてきた。そして、たしかにいまではたいいていのが実現されました。本をはじめ、生活用品はネットで注文すれば、家から一歩も出なくて手に入りますから。

でも人との会話がほとんどなく、それでも一人で生活していくのに困

らない暮らしは、果たして私たちが思い描いてきた明るい未来が実現した形なのでしょうか。あまりにも利便性を追求しすぎた結果、他者や地域との接点が極端に薄くなった姿は、想像していた明るい未来とは違っていると感じますね。

保育園が足りないので建設しようとしても、都市部では近隣からクレームが入る。自分の子どもや孫の声であれば騒音とは感じないだろうに、他人の子どもの声は騒音だと感じる。——このようなエゴイズムの横行に、実は多くの人たちは「それはあんまりだ」と思い、そこまでできてしまった世の中への違和感を持ち始めたのではないのでしょうか。

加えて、地震や豪雨といった自然災害が、いともたやすく日常生活を破壊し、私たちの暮らしは、とても脆いものなのだと痛感させられてい

ます。暮らしが脆いうえに、他者や地域とのつながりが希薄なのですから、多くの人が危機感を募らせるのは当然だと思えます。

だからこそ、地域の交流拠点を作り直したい、あるいはもうちょっと強めたいといったニーズが高まっているのでしょうか。「子ども食堂」が増え続けているのには、そういった背景があると思います(現在約三七〇〇カ所)。そうでないと、利益も出ない、時間と労力はけっこうかかる活動が、この不景気の時代に爆発的に増えていく説明ができません。

——祭りのテントでお酒を飲んでいたのはおじいさんばかり。女性たちはお酌をして、忙しそう。そこに加わりたいかというところ……。地域の結びつきが弱くなったのは、こうした姿もあるんじゃないでしょうか。まさに、その女性たちが中心とな